

# 在宅ホス。ピス対応型集合住宅 「きぼうのいえ」の試み

きぼうのいえ 施設長

山本雅基さん

日雇い労働者が住む町として知られる山谷に、これまで私は何度か訪れている。

私自身、高齢者介護の現場のほかに、現役サラリーマンやそのOBというビジネス戦士の鑑をまとってきた人々を数多く取材して、執筆活動をしてきた。そうした組織人とは対極にある日雇い労働者たちと、狭い赤ちようちんで肩を寄せあうようにして焼酎を飲み、なにげなく言葉をかわしている、管理社会に身をおかない人たちのたくましさや弱さ、優しさや孤独に気づかされたりもする。いつか山谷の本を著したいと思いつながら、いまだに果たせないでいる。

JRの南千住駅で降り、浅草方面へ歩き、汨橋交差点から明治通りを渡ると、簡易宿泊所が密集する通称「ドヤ街」にさしかかる。どうして「汨橋」という名がついたのか、そもそも平地なのになぜ「山谷」なのかと、いつも気になっていた。

この原稿を書くにあたって、何冊もの地名語源事典をめぐってみると諸説ある。どうやら「三野」がもともとの呼称らしく、昔その辺りは浅茅原、小塚原、吉原という三つの原野であったという。歳月をへるうちに「三野」が「山野」（未開地のこと）、そして「山谷」と変わっていったらしい。

江戸期、三野のひとつ小塚原には鈴ヶ森（東京・品川区）と並ぶ処刑場があったし、さらにひとつ吉原には「遊女三千」といわれた巨大遊郭があった。その一帯は特殊な場所として形成されてきた。



「汨橋」の由来については、そこに思川が流れ、処刑の前に最後の別れを告げる所とされていたという（その後、思川は埋め立てられた）。

第二次大戦後、山谷の中心部にある玉姫神社の周辺に簡易宿泊所が建ちならび、そこに日雇い労働者が押しよせ、住みつくようになり、日本が高度成長期を迎えた一九六〇年代、ドヤ街に住む日雇い

加藤 仁

著者紹介：かとう ひとし  
昭和22年(1947年)、名古屋市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。雑誌編集者を経てノンフィクション作家として独立。著書に『定年後をパソコンと暮らす』(文藝春秋)、『たった一人の再出発』(読売新聞社)、『介護を創る人びと』(小社)など多数。

労働者は二万人を超えた。

そしていま、赤ちようちんで白髪のみだつ労働者と語りあうと、一九八〇年代における東京都庁の庁舎建設のころが「最後の花」であったという。その後、バブル経済が崩壊して、日雇いの仕事にもあぶれる者も多くなり、秋風が吹きつづけている。

現在、そこに住む日雇い労働者は五千五百人、もはや帰る場所もなく半数が簡易宿泊所に住みながら生活保護をうけているといわれる。木造アパートのようであったり、ミニマンションのようであったりもする簡易宿泊所は「一泊二千三百円」が相場といったところ



「きぼうのいえ」の外観

しかし以前ほど日雇いの仕事がなく生活費に窮し、簡易宿泊所に泊まることもできず、路上生活者になってしまふ労働者もいる。近くの公園に青いビニールテント

か。《福祉の方、大歓迎》と大書した紙を玄関に貼る宿泊所も何軒かある。《福祉の方》とは、生活保護（一カ月約十五万円）をうけるひとのことであり、宿泊所の側からすると、料金の取りはぐれないらしい。

たそがれどき、山谷を歩くと、その日の仕事をおえて、コンビニやスーパーのビニール袋を手にした男たちが、宿泊所へと帰っていき姿を見うける。袋の中身は、その夜の食料のようである。テレビを見ながら酒を飲み、レトルト食品を食べるのがなによりのためしみなかもしれない。なかには孤独をまぎらわすため酒に溺れる者も少なくない。

### 山谷にホスピスを

山谷の中心部に「きぼうのいえ」が建ったのは、平成十四年十月のことである。

を張ったり、夜になってアーケード下の商店がシャッターを下ろすのを待ちかねるようにして、そこにダンボールの寝屋を造ったりする者もいる（近くを流れる隅田川の河川敷には、ビニールテントが密集している）。

私が山谷を訪れるたびに、目のあたりにして痛感させられるのが、こうした路上生活者の増加と日雇い労働者たちの「高齢化」である。ここ数年、とりわけ杖をついて歩く男たちが増えた。としをとりに足腰が弱った者もいれば、脳卒中の後遺症があるような者もいる。昼間、無料診療所の前には、仕事ができない高齢の人たちが並んでいる。

鉄筋四階建ての建物のなかに個室が二十一室あって、そのほか食堂、談話室、厨房などが設けられている。「東京都届出第二種社会福祉事業施設」とされてはいるが、ごく一般的な定義でよくくれるような施設ではない。社会福祉法の定義では、ここは「宿泊所」となっ

まう。その「宿泊」料は、三食つきで月額十二万三千円、生活保護をうけている者も利用できる料金が設定されている。

「在宅ホスピスケア対応型集合住宅です」と施設長の山本雅基さん（昭和三十八年生まれ）は語る。この言葉を耳で聴くだけでは、私はさまざま呑みこめなかった。文字におきかえ、在宅／ホスピスケア／対応型／集合住宅と文節ごとに区切ってみると、純然たるホスピスではないが、本人が希望すればその対応もいたしますという住まいであるというように理解できる。

山本さんは、体重八十kg以上もありそうな巨漢ながら少年っぽさを感じさせるひとである。話を聞くうちに、理想や理念を生きた糧にしていくことがうかがえた。

「山谷には昔から興味がありません。テレビなどで報じられるのを見てみると、酒を飲んで道端で倒れているひとがいたりして、ひどい状況だなあと思ったりもしました。しかし、ひとつ間違えば、ここに自分もたどり着いていたかもしれませんからね」

高齢の労働者の多くは、家族との縁を絶ちきり、身寄りもなく生きてきた人たちである。本人がそうすることを望んだのかどうかは

さておき、組織に属するのでもなく、一般社会からは疎外されて、ひとりの生活を貫いてきた。この人たちが倒れたとき、いったいだれが世話をし、看取りをするのか……。ノーベル平和賞を受賞した修道女マザーテレサの「死を待つ人の家」のイメージが山本さんにはあって「きぼうのいえ」を開設したという。

有給の職員十一名とボランティア三十名で運営している。

「日課や生活の管理は、必要最低限のことしかしませんし、飲酒も喫煙も可です。それでもケアつきということ、私もふくめて、おせっかいでうるさいスタッフやボランティアが、ここにはいます」と笑いながら山本さんは言う。

後述するが、山本さんはクリスチャンであり、教会とも深く関係してきた。しかし宗教を押しつける



山谷の夕景



のでもない。この「きぼうのいえ」を取材して、私がいいなあとと思うのは、その住人たちがのびのびとふるまっていることである。

玄関前の陽たりのいい道端では、老いた日雇い労働者ふうの男性が、ごろりと寝そべっている。さながらネコが昼寝をしているようで、気持ちよさそうである。あとで知ったが、この八十四歳の男性は「きぼうのいえ」の住人であった。もちろんベッドや洗面所つきの自室があるのだが、気ままに暮らしてきたこの男性にしてみれば、天気のいい日は部屋よりも路上のほうがいいのかもしれない。痴呆の症状もあるという。

この男性、それまで日雇いをしながら、簡易宿泊所で暮らしつつ、その年齢になった。宿泊所のすぐ前に「きぼうのいえ」が建ったこともあって、山本さんに「ここに入れてください」と懇願したという。やはり気ままに暮らしているも、自身の最期を想うと、絶望がこみあげてきたのであろう。

## 挫折をのりこえて

若いころの山本さんは、思いつめるタイプであったらしい。高校時代、哲学書を読みふけり、ノイローゼ状態になって、二年生で中退している。通信教育のNHK学

園で学び、高校卒の資格を得ると、おなじく通信教育によって慶応大学で学ぶことにした。しかし数多い通信制大学のなかでも慶応は容赦なく講義をすすめ、卒業にこぎつけるのは二十人に一人といわれる。山本さんは挫折した。こうした体験があつて「ひとつ間違えば、ここ（山谷）に自分もたどり着いていたかも」という言葉が口をついて出るのかもしれない。

慶応卒業をあきらめた年の夏からプロテスタント系の教会にかよいはじめ、暮れには洗礼もうけた。そのころは「牧師になりたい」と思っていた。しかし三年後には日本聖公会へ移り、さらにはカトリックの信徒となった。二十八歳にして上智大学神学部に入學した。しかし山本さんにとって俗世間から閉ざされ、絶対服従を強いられる修道生活はつらく、ここでも挫折しかけたという。

「ここで投げだしたら、高卒のまま。ひとつぐらいいまともに取りくむのがいいと思ひましてね」

教会の神父からも「考えこみすぎ、ノイローゼになるタイプ」と言われ、閉鎖社会から雑多な社会に身をおくようになる。学生ボランティアとして、ファミリーハウスの実現と運営の活動にたずさわる。遠隔地から入院や通院をする

小児ガン、白血病などの難治性疾患の児童と看護にあたる付き添い家族のために奔走する。病院の近くに宿泊施設を開設するべく、寄付金をあつめたり、一軒家やマンションを提供してもらおうと呼びかけたりした。大学卒業後はその専従スタッフとなった。

そしてNPO法人になったファミリーハウスを平成十三年に退職すると、日本版マザーテレサというべき「死を待つホームレスの家」の問題に取りくむようになる。最初はアパートを二、三室借りて、そこで看取りをする考えでいた。しかしそれよりも家賃三十万円で足立区内にある6LDKの一軒家を借りて、グループホームを開設する構想に傾いていく。あと一歩で実現するところまでこぎつけたが、町内会長をはじめ、住民たちの反対があつて頓挫した。

以前、その町にはオウム真理教（現アレフ）信者が拠点を設けて住民たちとトラブルを巻き起こしたし、よからぬ人たちが出入りする施設であると誤解をされたようでもある。いずれにせよ、住民たちは「迷惑施設」としてうけとめたのである。

山谷に買い手のない四十坪の土地があつた。以前はそこに銭湯があつたのだが、立ちゆかなくなっ



ドヤの住人の高齢化は深刻である

たらしい。この土地を購入して、鉄筋四階建てのハードをこしらえることにした。さすがに山谷の住民からは反対の声はあがらなかった。

開設の募金を呼びかけるにあたり、山本さんはパンフレットにこう書いた。

《家を失った人はホームレスと云われて蔑まれ、その存在さえ疎まれ、社会に復帰するすべもなく、餓えと寒さ暑さに打たれて、人知れず孤独のなかで死を迎えています。そんな方々が年間何百人もいるのをご存知でしょうか。（中略）きぼうのいえは、そのような方々でさらに人生の残りの日々につきばしい期限がついた魂にやすらぎを提供するハウスです。ここに來られる方は皆、人生での重なる喪失体験（失職、離婚、一家離散、死別）など長年にわたる労苦からくる霊的な痛み（Spiritual Pain）に深く傷ついています》



看護師の奥様とともに

寄付金六千万円と銀行からの借入金一億五千万円によって「きほのいえ」が建った。

## 新しい試みをひろげる

繰り返かえすが、社会福祉法の定義では「宿泊所」である。当初、山本さんは介護保険の対象施設にすることも考えたという。

「もらえるものは、なんでもいただくのがいいと思ったのですが、費用対効果（コストパフォーマンス）からすると、このほう（宿泊所）がいい。廊下の広さや人員配置をどうするといった縛りはありませんからね」

行政のヒモつきになると、なにごとをするにおいてもお伺いをたて、その結果、自分たちの理念から遠ざかっていくことを恐れたいようでもある。ただし、ヘルパー派遣、訪問看護など利用できる介護サービスは利用している。連携している医療機関や事業所、NPO団体は三十三カ所にのぼる。

「毎月の赤字は八十万円にのぼりますが、寄付金によって埋めます。寄付金のほとんどは教会関係からのものです」

前述したように、かつての哲学

青年はその後に教会遍歴をし、あえていえば人生の道草を食ったひとである。しかしその間「トントン拍子組」にない人脈をきり拓いてきた。それが山本さんの財産であった。看護師の資格をもつ妻の美恵さんとも、ボランティア活動を通じて知りあった。

入居者の一人、吉田さん（仮名）と語りあった。もともと船乗りだったが、遊び人というか、女性が大好きなひとのようで、そのため職場も家庭も失ったように思われる。今年七十歳になるが、それまで山谷では靴磨き、板前、旅館の番頭、宅配便の運転手、テレクラのプラカード持ち、そのほかここには書けないような裏道の仕事にもたずさわってきた。しかし脳梗塞を患い、昨年からは眼も視えなくなり、「きほのいえ」へとやっ

てきた。

「ここがなかったら、いまごろ病院を転々としていたでしょうね」

と言っていた。

屋上には礼拝堂がある。入居者に宗教を押しつけるのではなく、乾いた土地柄を少しでも潤すために設けることにしたという。本来ならば聖書がおかれる棚に、遺骨を納めた箱が並んでいる。開設から一年半、この間に六人の入居者が亡くなった。そのうち三人は遺骨の引きとり手がなかったという。

「将来、谷中霊園に共同墓地を買いたいと思っています。それまで待つてもらっています」

今後ますます山谷の高齢化はすすむことであろう。活動の一環として、運営ノウハウを蓄積し、周辺にある簡易宿泊所に提供していくことも大切になるのであろう。